

『嵐が丘』の「ヒース」 そして「恋の花」の博物学

松原典子

1. 『嵐が丘』について
2. キャサリンとエドガーの「クロッカス」
3. キャサリンとリントンの「ヒース」
4. キャサリンとヘアトンの「桜草」
5. まとめ

1. 『嵐が丘』について

『嵐が丘』(Wuthering Heights、1847)というタイトルから、この作品が嵐の吹きすさぶ荒涼とした世界に繰り広げられる物語りであると想像することは十分可能である。また『嵐が丘』が繰り返し映像化されてきたことで独特の世界観を与える作品である。冒頭に映し出される凄まじい寒風と人間を疎外する場所と、恐怖を呼び起こすような風の唸りの音響効果が相まって、非常なインパクトを与える画面となっている。『嵐が丘』を象徴する映像¹の中で語り手ロックウッドが登場する。

このような『嵐が丘』のタイトルと映像が、原作『嵐が丘』の固定観念を植え付けているといえる。その中で主人公ヒースクリフとキャサリンの愛憎物語が始まる。ただし『嵐が丘』は2世代に渡る愛憎劇、つまりキャサリン親子(母キャサリンと、娘キャサリン)をヒロインとした愛憎劇であるが、映像化されたものは初代だけの愛憎劇に終わるものがほとんどである。

キャサリン・アーンショーの父はリバプールで捨てた男の子に、ヒースクリフという亡き息子の名前をつけた。「あなたは変装した王子さまにぴったりだわ。お父さんが中国の皇帝でお母さんがインドの女王さま……あなたは悪い船乗りにかどわかされてイギリスに連れてこられた」(88頁)²から色黒のヒースクリフは、リバプールを中心とした大西洋と西インドの三角貿易時代の落とし子と考えられる。アーンショー氏の秘蔵っ子となったヒースクリフ

は、息子のヒンドリー・アーンショーとは、嫌悪と復讐心だけの間柄である。キャサリンとヒースクリフは、荒野の申し子のごとく時間さえあれば自然の中で過ごし、ヒースクリフを良しとする人物はキャサリンだけである。いつものように荒野で過ごし、偶然リントン家の屋敷を覗いていたとき、キャサリンが犬に咬まれ、彼女だけがリントン家で保護され、瑕が治った時にはじゃじゃ馬から本物のお嬢様に変身していた。これがきっかけでキャサリンはエドガー・リントンと結婚することになった。「ヒースクリフと結婚したら乞食になってしまう。」(126頁)の部分だけを聞き、それに続く有名な「私がヒースクリフなの。」(139頁)という、キャサリンの永遠不滅の愛の言葉を聞くことなくヒースクリフはその場を立ち去り、姿を消した。ヒースクリフは聞いた言葉だけを糧に過ごしたらしく、外面は田舎では珍しい紳士となって村に戻ってきた。養父アーンショー氏はすでに亡くなっていたのでヒースクリフの狙いは、ヒンドリーのアーンショー家とキャサリンの嫁いだリントン家に対する復讐であった。ヒンドリーを酒で墮落させ、その息子ヘアトン・アーンショーを無学文盲の使用人に仕立て、自らはエドガーの妹イザベラ・リントンをかどわかし結婚する。キャサリンの死後、その忘れ形見のキャサリン・リントンと息子リントン・ヒースクリフを結婚させ復讐は成功に近づいた。この狂人化したヒースクリフの生きざまは、暗い厳しい自然と、ロックウッドが見た夢とがあいまって、『嵐が丘』の世界を発信しているといえる。しかもその映像化された冒頭場面は、視聴者に対する戦略として成功してきたと考えられる。

つまり冒頭のロックウッドの語り、「きのうの午後は霧と寒さで始まった。ぼくは、ヒースと泥んこのなかを嵐が丘まで苦勞してぐり抜けて行くより、一日書斎の炉辺で過ごすかと半ばそう思っていた。」(12頁)は、ヨークシャーの厳しい自然が都会人のロックウッドにとっていかに耐えられないものかを訴えかけてくる。そしてこのロックウッドの語る印象の第一要素として映像化される際に、「ヒース」が使用されてきたことで、原作の『嵐が丘』と映像の『嵐が丘』両方の象徴イコール「ヒース」という観念が定着してきたと考えられる。そこで象徴的存在である「ヒース」の中で展開する第一世代と第二世代の愛と恋の描写を再読しながら、そこに描かれた恋の花について検証していく。

2. キャサリンとエドガーの「クロッカス」

キャサリン・リントン（旧姓アーンショー）の義妹イザベラ・リントンとヒースクリフとの駆け落ちは、キャサリンに大きな心労を与え、悪性の脳膜炎を発症させたが、夫エドガー・リントンの献身的看病のおかげで、キャサリンはこの病魔から抜け出すことができた。キャサリンが初めてベッドから起き上がった日の朝、枕元に一握りの金色のクロッカスが置かれていた。

一心にそれをわが手に拾い集めながら、まことに喜ばしげにその目を動かすのでした。「これは嵐が丘では一番早く咲く花だわ！」……「雪融けのころの軟らかな風と日光と、ほとんど融けてしまった雪を思い出すわ……」(215頁)

もちろんこの「クロッカス」はエドガーが準備したものだった。エドガーの配慮により、キャサリンはイザベラとヒースクリフの駆け落ち騒動を忘れ、平穏な時間を得ることができた。『嵐が丘』の中で唯一、エドガーとキャサリンが夫婦らしい時間を共有する場面である。その頃、キャサリンは新しい命を宿し、新たな未来が開けるはずであったが、病気が未完治のまま、七カ月の早産でこの世を去った。キャサリンとエドガーの結婚生活は、ヒースクリフの存在が常に付きまとう奇妙な三角関係でもあった。しかしキャサリンの死が近づいたとき、初めて二人だけの夫婦の時間を持つことができ、その空間に夫婦愛の象徴として「クロッカス」が描かれていると言える。

ここで「クロッカス」についてみておく。

「クロッカス」はアヤメ科のクロッカス属に分類され、種名のヴァーナスは「春咲きの」を意味している。この「クロッカス」の語源はギリシャ語のクロコスで、もとはセム語にまで遡り、ローマ時代にクロコスがクロカス、クロカムと変遷を繰り返したといわれている(『花の名前』、147頁)。またギリシア語の、めしべが糸状に長く延びることに由来するクロケという糸を表す言葉に由来するとも言われている。

「クロッカス」の原産地は地中海沿岸から小アジアで黄、白、薄紫などさまざまな色の花を咲かせ、開花時期は早いところでは一月、一般には二月から三月に開花する。冬の暗さを破る明るい黄色は、特に春の花の代表格である。ヨーロッパでは古くから、雪解けを待ちかねたように顔を出す「クロッカス」は、春の到来を告げる花として親しまれてきた。このように「クロッカス」は日差しを浴びて気温の上昇とともに開花し、曇りの日や夕方以降気温が低くなるにつれ閉じていく。ちょうど冬を抜け出た早春の明るい太陽と、暖かさの中で開花する花であり、トムソンの有名な詩「春」に早春の花として親しまれている。しかも「クロッカス」は、踏まれれば踏まれるほど強く丈夫に育つといわれている。また「クロッカス」は聖バレンタインのころに咲き、2月14日の花ともいわれている(『花を愉しむ事典』、106頁)。キャサリンの回復は「クロッカス」の開花時期と重なり、亡くなるのは秋咲きの「クロッカス」が終わる頃である。キャサリンの夫婦愛に溢れた最期の半年は、太陽の光りの移り変わりと同調しているのである。

「クロッカス」の花言葉は「快活」を想像させてくれる。春咲く「クロッカス」は「若さの歓喜」、秋咲く「クロッカス」は「陽気」である。秋咲きの「クロッカス」は8月から10月にかけて葉が枯れ、その後短い茎に薄紫の花が咲き、物悲しい風情を見せる(『英文学植物考』、203-204頁)。黄色の「クロッカス」は「私を信じて」、「切望」、「歓喜」を、赤の「クロッカス」は「愛しすぎる心配」、紫系の「クロッカス」は「愛したことを後悔する」のように色によりそれぞれの花言葉を持っている。キャサリンの夫婦生活に割り込む形で登場するヒースクリフに対して、「私を信じて」はエドガーのキャサリンへの愛でもあり、キャサリンのエドガーに対する思いでもある。そして「切望」は病床のキャサリンへの夫として、生まれてくる二人の子供の母として生き抜いてほしいというエドガーの強い思いと、新しい命との新しい家族への希望と喜びでもある。

ところで「クロッカス」に関するいくつかのギリシア神話がある。

たとえば、羊飼いの娘と恋仲だった青年クロッカスが神々の反対に会い、悲嘆のあげく自

殺し、それを哀れに思った花の女神フローラが、彼の亡骸をこの花、「クロッカス」に変えたことから、「愛したことを後悔する」という花言葉もできたとされる。

ほかにヘルメスの神話がある。ヘルメスには美しい婚約者がいた。ある冬の日、二人は谷の近くで遊んでいたが、風が強くなり、急いで帰らなければと思いソリで帰ろうとした。婚約者がソリに乗ったあと、続いてヘルメスが乗ろうとしたとたん、ソリが谷底に落ちてしまった。ヘルメスはばらばらになったソリの中で、血を流して死んでいる婚約者に気づき生き返らせようとしたが、彼女は永遠に息を吹き返すことはなかった。翌年その谷底にやってきたヘルメスは、その場所にかわいらしい花が咲いているのを見つけ、婚約者の名前からその花を「クロッカス」と名づけた。このヘルメスと「クロッカス」の関係はいつまでも会いたいという「切望」、そして生存中の「青春の歓喜」という花言葉につながるのである。

別のギリシア神話では、クロッカスという若者が、妖精のスミラックスに恋したが、情熱を傾けた愛が報いられなかったため、彼はやせ衰え、死んでしまった。哀れんだ神々は、彼を「クロッカス」に変え、スミラックスをセイヨウイチイの木にしてしまった。他にもプロメテウスが山中で縛られたとき、その血が「クロッカス」を生み出し、火を吐く雄牛からイアソンを守った草ともいわれる（『英文学植物考』、151頁）。また、「クロッカス」は結婚の床を飾るのに用いられ、ゼウスとヘラの寝床を作る花にも使われた。他にアルプス地方には、年取った狼が、猟師ライネルの一人息子クローカスを気に入り、自分の娘と結婚させようとさらった。ライネルは大切な一人息子を失い悲嘆に涙し、ライネルの涙が雪の上に落ちてさまざまな色の可憐な花が咲き始め、村人はこの花を「ライネルの涙」と呼び、それが後に、「クロッカス」と呼ばれるようになったという伝説もある。

さらに「クロッカス」は祖先の墓の周りに咲き乱れ、永遠の春を願うことから死の象徴でもある。夏には色とりどりの快活を象徴とする「クロッカス」が、そして冬には春を待ち焦がれながらアポロの祭壇を飾った花ともいわれている。キャサリンの「クロッカス」は死を彷彿させる最後の時を、愛するエドガーにより飾られた花だと見なすこともできる。

3. キャサリンとリントンの「ヒース」

「ヒース」（エリカ）の描写を引用してみる。

教会墓地の隅の、塀が低くなっていて、ヒースやコケモモの草木が荒野から塀を越えてはびこり、ピートの地面がほとんどそれを埋もれさせている緑の斜面に掘られました。（271頁）

清らかなヘザーの香りのする空気、晴れ渡った日の光、ミニーの穏やかなキャンターがしばらくの後、彼（リントン・ヒースクリフ）の失望を救ってくれました。（329頁）

暑い7月の一日を過ごす一番楽しい方法は朝から晩まで荒野の真ん中のヒースの土手に寝転がっていることだって彼はいうの。（397頁）

彼（リントン・ヒースクリフ）はヒースの上に横たわって、私たち（キャサリン・リントンとネリー）が来るのを待っていました。(418頁)

私たちはいっしょに（キャサリン・リントンとネリー）ヒースの斜面を登って行きました。(426頁)

ナツザキエリカの間でかさかさという音が聞こえたとき、わたし（ネリー）は眼を上げて、ミスター・ヒースクリフがほとんど私たち（キャサリン・リントンとネリー）の間近に迫り、ハイツを下ってくるのが見えました。(429-430)

これらは、『嵐が丘』第二世代のキャサリン・リントンとリントン・ヒースクリフの恋を予感させてくれる。従姉弟のキャサリンとリントンは、ともに片親という家庭的な愛情に乏しい中で成長した。キャサリンは、母キャサリンが自らの命と引き換えに生まれたことで、母親の愛を知らずに育った。19世紀初期のイングランドでは、家長の父親は子供の世話を使用人に任せるのが常識であったので、エドガーは母のない娘に対しても一般的な父の愛情は十分に与えたが、母の愛情を付与するほどに接することはなかった。常にキャサリンは父を心配させないように気配りのできる子供であったので、できるだけ「ヒース」の中で遊んだ。リントンは母イザベラがヒースクリフから逃れ、一人で育てたのだった。実家であるリントン家についてだけを聞かされ、実父ヒースクリフについてはほとんど知らされず、父という存在にまったく感情を持っていなかった。母との生活の中で、リントンにとってヒースクリフは恐怖と破壊者としてしか存在していなかった。

しかしヒースクリフは、息子リントンとその従姉であるキャサリンを結婚させ、復讐を完遂する画策をしていた。ヒースクリフの復讐の方策はリントンに血のつながりを強調することで、リントン家に目を向けさせキャサリンと「ヒース」で遊ぶ機会を創り出し、その流れの中でキャサリンに従姉弟愛を目覚めさせ、一気に結婚へと目論んでいた。上の引用場面は、「ヒース」の厳しさや壮絶さとは対極の、いかにものんびりした世界を見せてくれる。その中でキャサリンとリントンは二人だけの時間を過ごしていく。ただリントンは父ヒースクリフからキャサリンと結婚することを厳命され、キャサリンをスラッシュクロス屋敷から遠ざけようとするが、気の弱さからこのミッションをなかなか果たすことができない。しかしキャサリンは従姉であることを重視し、愛に飢えたリントンに対し保護者のように振舞う。キャサリンもリントンも出会う前から親の話でお互いの存在は知っていた。エドガーとイザベラはそれぞれお互いを心配し思いやり、それがそれぞれの子供にしっかりと伝わっていた。ヒースクリフの甘言に騙されて結婚したイザベラの遺言で、リントンはエドガーに引き取られることになっていたが、ヒースクリフがそれを認めるはずもなく、リントン家にはたった1日滞在しただけで、翌朝キャサリンが起きる前にむりやり嵐が丘に連れて行かれた。数年後、偶然キャサリンとリントンは「ヒース」の中で出会った。それが、ヒースクリフの結婚・復讐という策略であることに二人は全く気付かぬままそのレールに乗せられ、そのまま結婚へと至ったのである。エドガーの大反対と心配はキャサリンに通じず、キャサリ

ンは言葉巧みにヒースクリフにかどわかされ、スラッシュクロス屋敷に戻ることでさえできずに結婚となった。結婚後のキャサリンは舅ヒースクリフの監視下で、病弱なリントンの妻としての毎日だった。ヒースクリフの強大な父権から逃れようとするリントンを守るキャサリンは母性の役割も負っていた。

ところで『嵐が丘』最終場面で描かれる「真ん中の墓石は灰色でヒースに半ば埋もれ……」（545頁）は、復讐の鬼と化したヒースクリフが絶食によりひっそりとこの世を去った後のエドガーとキャサリン夫婦の墓石の描写である。この「真ん中」という奇妙な表現から、墓石が三つ並んでいることがわかる。ヒースクリフが夫婦（第一世代）の間に割り込んでいることになる。しかもその辺りで村の子供は、「ヒースクリフと女の人がいるんだよ、向こうさだ、山の端の下さだ」（543頁）という幻影を見たのである。悲惨で非情な愛憎はすでに消え去り、ヒースに覆われた墓の下で、リントン夫妻とヒースクリフは鎮まった靈魂として生き続けている。もちろん「私はヒースクリフ」そして「俺はキャサリン」と叫びながら、二人の靈魂は万物流転のごとく永遠に、ちょうど二人の子供たち、キャサリン・リントンとリントン・ヒースクリフに、純粹で穏やかな時間を与えた「ヒース」の中で、来世は友人として穏やかに生き続けると願いたい。一方、エドガーは二つの靈魂が抜け出た隣の墓石の下で、子供のように振舞う妻とその相手を寛大な心で見守りながら、ひっそりと静かに眠っていると信じたい。このように「ヒース」は、意外にも穏やかな世界を展開してくれる。

ところで「ヒース」はエリカ属のツツジ科に属し、学名を「カルーナ・ヴルガルス」といい、属名のカルーナはギリシア語の「洗浄する、浄化する、掃除する」の意味を持つカルーノに由来する。細く硬い革質の葉と幹を持つ膝丈位の低木である。ヨーロッパから小アジア、アフリカに生育し、特に南アフリカで種が多い。イギリスで見られる「ヒース」とは種が異なるようである。夏になると釣鐘形の五ミリほどの小さな赤紫や紫、ピンクや白の花がちょうど穂紫蘇のような形に咲く。そしてイングランドでは「ヒース」、スコットランドでは「ヘザー」と呼ばれることが多い（『英米文化常識百科事典』、171頁）。そして「ヒース」という呼称は、単体の植物というより、荒野や丘や山に群生する常緑樹の総称で、さらに痩せた酸性土壤に生育する低木またはその土地を表す。しかもこの方が多いのである。ちょうど『嵐が丘』の映像に映し出される「ヒース」の荒野である。ブロンテ姉妹の故郷ハワースの晩夏、荒野はバラ色がかかった紫色で一面美しい壮大なワイドスクリーンを呈してくれる。不思議なほど赤紫色で、稜線まで霞がかかるように広がる風景はすばらしいの一言である。しかし足元をよく観察すると、「ヒース」以外に燈芯草、日本でいう「イグサ」やシダ類がはびこり、土壌はかなり湿っている。それらの植物の背丈は膝丈ほどあり、その中で「ヒース」は唯一の花らしい姿を見せる植物といっても間違いではない。開花する直前に摘んだ花の先端は、オリーブ色がかかった黄色の染料となるそう（『花を愉しむ事典』、86頁）。そして枯れた「ヒース」は、冬になると一面黒い荒野の主人公になる。野焼きされるのである。そして雪の中で命を保ち、春が過ぎ夏がおとづれるとあのすばらしい荒野へ変身するのである。ちょうど主人公たちが暗い墓石の下に収まった後、キャサリンとヒースクリフが新たな世界に飛び立つようにである。

ところで「ヒース」の花言葉は色によって異なっている。赤系の花は夏至に関連することで、一年の前半を支配する豊饒の王の死と結びつけられる。つまり赤く情熱的な女神キュベレが性交してオスを殺す女王蜂の女神とされることから「熱情」、そして白い「ヒース」は「熱情の行為の防止」という花言葉となる。ヨークシャーでは、結婚式のブーケに赤系の「ヒース」は忌み嫌われ使用されない。この習慣も花言葉に関係するのだろう。しかし白い「ヒース」は結婚式に使われると聞いた。スコットランドで呼ばれる「ヘザー」も、白い「ヘザー」は「幸運」を意味している。ただ一般的に「ヒース」の花言葉は「孤独」である。『嵐が丘』の二世代の主人公たちは、それぞれ「ヒース」を象徴する「孤独」な人生を送ったのである。主人公ヒースクリフは、この「ヒース」と「クリフ」(崖) からきていると言われることも多い。白い崖はラテン語で「アルピオン」、そしてこの名称はイングランドの通称である。つまり荒野の「ヒース」とどこの生まれとも知れぬ人物が、イングランドの石灰の白い崖の遙かかなたからやってきたと想像させるためにエミリ・ブロンテ (1818-48) が命名したともされている。これから想像してもヒースクリフは荒々しい人物で、生まれも分からぬ流れ者というところである。

ところで古代エジプトでは「ヒース」がオシリスの体の周りに生えたので、イシスに捧げられた聖なる木であり、それにより棺の木でもあった。

聖書では「エレミヤ書」の17の6に「彼は荒れ地の裸の木。恵みの雨をみることなく人の住めない不毛の地、炎暑の荒れ地を住まいとする。」、そして同じく48の6で「逃げる、自分の命を救え。しかしお前は荒れ野のアロエルのようなになる。」とある(拙者傍点)。ちなみに「アロエル」とは荒野を明確に表現するために使用される地名であり、「ヒース」という植物名は訳出されていない。それほど「ヒース」が持つ荒々しさは強烈であるというところなのだろうか。

因みに『イギリスの歴史地名事典—歴史地名篇』にはヒースロー(荒地またはその近くに立つ家並み)やダービーシャーのヒースコート(荒地にある小屋)、レスターシャーのヘザー(ヒースが一面に茂る場所)、スタッフォードシャーのヒース・ヘイエ(ヒースで覆われた囲い地)などの地名が掲載されている。どれも「ヒース」の荒野を想像させる地名である。

4. キャサリンとヘアトンの「桜草」

『嵐が丘』第二世代には二組の恋人たちが登場する。第一世代の主人公キャサリンとエドガーの忘れ形見キャサリン・リントンとヒースクリフの息子リントン・ヒースクリフと、リントン・ヒースクリフと死別後のキャサリン・ヒースクリフとヘアトン・アーンショーである。

前述したように、キャサリンとリントンの結婚にいたる経過は、従姉弟という間柄から湧き出る好奇心と同情心から出発していた。そしてリントンとの短い結婚生活が幸福であったとはまったく想像できない。しかも父エドガー・リントンの死去とともにスラッシュクロス屋敷はヒースクリフの所有になり、その空き家同然の屋敷に戻ることにさえ許されなかったキャ

サリンは、未亡人としてというより、義父ヒースクリフの監視下に置くという強い拘束により嵐が丘に留まらされたとするのが正しい。

そんなヒースクリフ家に同居していた従兄でアーンショー一家の血を引くヘアトン・アーンショーとキャサリンとの関係は、リントン生存中も死後もまったく同じで、キャサリンはヘアトンの存在自体を嫌悪していた。未亡人になったキャサリンに対する舅ヒースクリフの暴言・暴力は続き、その楯になったのがヘアトンである。実父よりヒースクリフを保護者として敬愛していたヘアトンは、ヒースクリフのキャサリンに対する態度にながしかの不安を感じていたのかもしれない。愛する人間（ヒースクリフ）が自分（ヘアトン）と同じ血を引く人間（キャサリン）で、しかも従弟の父（ヒースクリフ）の嫁（キャサリン）を虐待することに対してである。キャサリンはヘアトンの無知さに驚きながらも、アーンショー一家の血という共通項と自分を守ってくれる人間性から徐々にヘアトンを気にし始める。無視する態度を取りながらも自分の存在を知らせる方法を考えるキャサリンはヘアトンが無知であるはずがないと信じ、彼を教育することで奴隷のような現状から脱却させようとする意識が働き始める。ヘアトンもアーンショー一家の血を誇りにし、無学文盲から脱却することが、キャサリンに気に入られることだと認識する。そして互いにヒースクリフの監視下でいかにその強権から逃れることができるかを模索していく。その過程で、血のつながりが恋愛対象へと発展していくことになる。

飲んだくれの実父ヒンドリ・アーンショー生存中のヘアトンは、愛を感じることはなかった。そのヒンドリに対し、嵐が丘の主になったヒースクリフがヒンドリの盾となってヘアトンを守る行為は誰の目にも理解不可能なことであった。もちろん幼いヘアトンは実父からの仕打ちと、実父を墜落させるヒースクリフの双方を理解できるはずもなかった。ヒースクリフはヘアトンの楯になりながらも、本来なら次の当主になるお坊ちゃまを、使用人、果ては奴隷のように扱うのだった。罵詈雑言は当然のこと、時には暴力を振るうこともあった。しかしヘアトンはヒースクリフを実父より信用に値する人間と信じるほど思考力に欠けた、動物的で反射的な行動しかできない子供である。それはヒースクリフの復讐の成果でもあった。キャサリンがリントンの妻としてヘアトンの前に登場した時でさえ、彼女の美しさ、上品さ、繊細さなど全く無関心である。しかしリントン亡き後、ちょうどヘアトンが成長期を過ぎるころに、彼女の持つ本来の美しさ、すばらしさ、女性らしさに気づき始め、男としての成長から生きる余裕と正常な感受性がヘアトンに芽生え始めたようだ。ただしヘアトン自身が自分の成長に気づいていたかははっきりしない。自分の精神的成長を認識できないほど心的欠陥人間でもあった。そのためかヘアトンの愛情表現はあまりにも子供っぽく純朴で、キャサリンから仕向ける形で進んでいった。それを表す描写が次のものである。

彼女（キャサリン）は彼（ヘアトン）のほうへにじり寄って行って、彼のお粥の皿の中に桜草を突っ込んでいました。（512頁）

一見悪ふざけのようであるが、18歳のキャサリンの愛情表現である。さらに23歳にもなるヘアトンに小さな庭を整備させ、その周囲を飾ろうと「桜草の根を何本か手に入れるため門の

近くまで駆け降りていった」(527頁)のも彼女の自由奔放さが示す恋心である。リントンとの結婚には恋愛感情はなかったが、今回の二人には他者からも初恋だと思われる感情が働いていたのは間違いない。ヒースクリフは二人の姿を目の当たりにして、

5分前にヘアトンは人間ではなく、おれの青春時代の化身のように思えたよ。(527頁)

キャサリン・アーンショーと自分の姿をこの二人に見たのである。亡きキャサリンと自由に「ヒース」の中で過ごし、言葉にすることなく永遠の愛を信じていたヒースクリフ自身がよみがえってきたのだ。自ら「化け物」と語るが、過去と現在が交錯し、単に恋愛でなく来世に続く超越した人間愛を目の当たりにしたとき、自分のキャサリンに対する愛も自分が復讐に至るほどの恋愛が、実際には所有する愛ではなく、共有しあう愛であることを、キャサリンとヘアトンの愛に気づかされたのかもしれない。この日を境にヒースクリフは部屋に閉じこもり食事もほとんど取らず、絶食の形で死を迎えた。同時にヒースクリフの永遠の愛が現世から来世へと受け継がれていった瞬間でもある。

ところで『嵐が丘』で初めて穏やかで自然な愛の場面に登場し、愛憎の果てに明るい未来を想像させてくれるのが「プリムローズ」である。

「プリムローズ」はラテン語のプリムラ+ローサ(「初ばら」)であり、イタリア語のプリマ・ヴェローラから出てきた言葉で「春一番の花」という意味を持つ(『花の西洋史事典』、381頁)。そして開花時期は一般に4～5月である。

プリムラは500種以上あり、色は淡黄色が主であるが、白、ばら色、紫、赤、暗紅色などさまざまで、甘い香りを振りまいている。イギリス原産のプリムラ・ヴェルガリスは「プリムローズ」と呼ばれ、色は月のような色をしている。サクラソウ科の多年草で、茎の長さは5～15センチ、直径は2.5～4センチ程度である。根元から伸び、散形花序に2から5個の花がつく。イギリスには、フランスのカルヴァン派の新教徒で宗教的迫害を避けるためヨーロッパ各地を流浪したユグノーが、16世紀末にもたらした(『花を愉しむ事典』、28-29頁)とも言われているが、16世紀末以前からイギリスの植物として大陸で知られ、ライラック色の「クウェーカー教徒の帽子」や「婦人の喜び」という名の種は寒さに強いと知られていた。キャサリンとヘアトンの恋の花「プリムローズ」は、ヨークシャーの北部に自生する寒さに強い種にちがいないがどんな色だっただろう。2009年のピーター・サスディ監督の『嵐が丘』の1コマに、ヘアトンが小さな花束をキャサリンに渡す場面が映し出される。多くの『嵐が丘』の映像作品の中で唯一、二人の純愛場面に「プリムローズ」と思われる白い花が登場している。

ところで17世紀以降、サクラソウ科のものが多種大陸から入り込み、品種改良が重ねられ、さまざまな色の桜草が出来上がったようだ。もちろん『嵐が丘』が出版された頃のイギリスの田舎の庭に「プリムローズ」はたくさん見られ、特に地方の労働者階級は自宅の狭い庭に植えた「プリムローズ」の品種改良に熱心であった。アウリクラ種は一本の茎に数多くの花を付けるので、一本だけで花束のように見えるが、これらも改良の産物である(『花の西洋史事典』、316-317頁)。そしてイギリスでは森や牧場、野原や生垣の根元などにさまざま

まな「プリムローズ」が自生している（『花のイギリス文学』、41頁）。

「プリムローズ」の「私を信じて」、「心変わり」、「悲しみ」、「無垢」、「恋人の疑念と不安」、「青春」という花言葉は、プリムラという語が持つ意味から生まれたようだ。

神話では、「プリムローズ」はプリアプスとフローラの息子パラリソスが、許嫁を失った悲しみでプリムラに姿を変えたとされ、そのため悲しみの花のシンボルに使われ、薄幸やはかなさを連想させる。これから「うら若き青春」という意味が出て、若さに任せた享樂的生活を比喩的にプリムローズ・パースという。ドイツやオランダの伝承では、宝の隠された洞窟を開ける魔法の鍵のひとつとされているが、いったん使用するとその力は失われる（『花を愉しむ事典』、316-317頁）、とある。

ところでイギリスでは吊花として使われることも多い。ヴィクトリア朝の首相ベンジャミン・ディズレーリが「プリムローズ」を大変好み、1881年の葬儀にヴィクトリア女王が「プリムローズ」の花輪を送ったといわれている。しかしヴィクトリア女王がアルバート公を偲んだ花で、女王の人生を代表する花が「プリムローズ」だったとする方が正しい。10代の王女だったヴィクトリアの母の甥（後のアルバート公）も恋多き父のもと母を亡くしてからは、ドイツの城にひとり佇む日々だった。家族愛に乏しい半生であった。そんな陰のあるアルバートにヴィクトリアは恋焦がれたのである。キャサリンとヘアトン、そして王女のカップルは立場こそ違え、愛に飢えていたことに共通点がある。そんな女王が生涯好んだ花が「プリムローズ」であったことも、興味をかきたてられる部分である。しかもこの女王の花輪がきっかけで、ディズレーリの命日の4月19日はプリムローズ・デイと呼ばれてもいるのである。

イギリス文学では14世紀に書かれたチョーサーの『カンタベリー物語』の「粉屋の物語」に登場する若妻の初々しさと年の離れた夫に、「青春」と「疑念と不変」の花言葉が合致する（『花のイギリス文学史』、41-42頁）。スペンサーやシェイクスピアなど多くの文学者の作品にも登場している。スペンサーは「真実」の花として、シェイクスピアは死を象徴する場面や涙、露を結び付けると同時に「忠実」を表してもいる。（『イメージ・シンボル事典』、507頁）。他にミルトンやワーズワースやスコット、さらにはジョイスやT・S・エリオットも「プリムローズ」を登場させている。エミリの姉シャーロットも『ジェイン・エア』³の中の厳しい寄宿学校の場面を、「野生の桜草で地面から日光が射したかと驚かされるほど。淡い金色が暗い木蔭に美しい光沢を撒き散らしている光景……」（115頁）と描いているが、それはジェインが、苦痛にまさる健全さを保持した青春を送っていることを表しているといえる。

日本では、「プリムローズ」は桜草としてなじみが深く、春の花として親しまれている。日本原種の「プリムローズ」の学名は、プリムラ・シーボルディでシーボルトに関係し、江戸時代の武士階級に好まれたようだ。明治以後、特に与謝野晶子がさくら草を登場させている。晶子は『さくら草』という詩歌集を上梓し、歌集『常夏』には「君しるやわが七鉢の桜草春さめふれば庭に袖ふる」という歌も載っている。『嵐が丘』の愛憎と与謝野晶子の激しい気性という認知度を考えると、その共通点に不思議なものを感じる。

5. 終わりに

『嵐が丘』には、二世代にわたり4組の男女が登場する。第一世代のヒースクリフとキャサリン・アーンショー、そして結婚後のキャサリンとエドガー・リントン、さらに第二世代のリントン夫妻の遺児キャサリンとヒースクリフの息子リントン、最後にリントンと死別したキャサリンとヘアトン・アーンショーである。今回、それぞれの恋・愛についての場面を再読しながらそれらの描写と、そこに描かれた植物を追ってきた。

常識とされている『嵐が丘』の荒涼さを象徴する「ヒース」は、第二世代のキャサリンとリントンに穏やかな時間を提供し、新たな「ヒース」像を教えてくれた。エドガー・リントン夫妻の最期の場面に登場する「クロッカス」は、夫エドガーの妻キャサリンに対する愛の深さを教えてくれた。二人の大切な娘キャサリンが、自ら選んだ相手ヘアトンとの恋は「プリムローズ」の若さと純粹さを象徴している。

「クロッカス」と「プリムローズ」は、特別に華麗ではないが、自然の中でそれぞれの美しさを発揮し、季節の変化を感じさせてくれる素朴な花の範疇にはいる。『嵐が丘』を誰もがイメージする世界とは異なり、そこに登場する人物たちの愛を求める姿は平凡な花とともにあると思われる。

〈註〉

1. 『嵐が丘』の常識を作り出した映像リストを上げておく。
ウィリアム・ワイラー監督、1939年。
ロバート・フュースト監督、1970年。
ジャック・リヴェット監督、1986年。
ピーター・コズミンスキー監督、1992年。
コキー・ジェドロイック監督、2008年。
ピーター・サスディ監督、2009年。
2. 拙論中の日本語訳は、中岡洋・芦澤久江訳『嵐が丘』、みすず書房、1996年を参考にした。
3. 小池滋訳『ジェイン・エア』、みすず書房、1995年を参考にした。

テキスト

The Brontes: Three Great Novels, Oxford University Press, 1994.

参考文献

- 『イギリス歴史地名辞典 歴史地理篇』、A・Dミルズ編、中林瑞松・冬木ひろみ・中林正身訳、東洋書林、1996年。
『イメージ・シンボル事典』、アト・ド・フリース著、山下主一郎他訳、大修館書店、1994年。
『英文学植物考』、加藤さだ著、名古屋大学出版会、1985年。
『シェイクスピアの花』、ジェシカ・カー著、井上れい子訳、成美堂、1994年。
『花のイギリス文学史』、金城盛紀著、研究社出版、1997年。

『花の西洋史事典』、アリス・M・コーツ著、白幡洋三郎・白幡節子訳、八坂書房、2008年。

『花を愉しむ事典』、J・アディソン著、樋口康夫・生田省悟訳、八坂書房、2007年。

『花の名前—ヨーロッパ植物名の語源』、L・ギョヨ&P・ジバシエ著、飯田年穂・瀬倉正克訳、八坂書房、1991年。

『与謝野晶子歌集—与謝野晶子自選』、与謝野晶子著、岩波文庫 緑38-1、岩波書店、2006年。

The Brontës: Life and Letters, by Clement Shorter Vol. I & II, New York: Haskell House Publishers, 1969.

The Language of Flowers, by Catherine Lee, Ryland Peters and Small, London, New York, 2007.

The Language of Flowers: A History, by Beverly Seaton, University Press of Virginia, 1995.

The Language of Flowers and the Classical Floral Legends, by Frederick Warne, London, 18--.